

「ためらい」の民族倫理学

－ ウイグル族との分析的対話 －

西 原 明 史

The Ethnoethics of “Hesitation”:

An Analytic Dialogue With Uighur

Akifumi NISHIHARA

要 旨

本稿の目的は、政治情勢が緊迫している新疆で例外的にウイグル族と漢族が平穏に共生する哈密地区の民族関係を定式化することである。まず現地調査によって収集したウイグル族や政府当局の言動を精神分析的に解釈したところ、ウイグル族には「公平を願いつつ不公平を受け入れる」という「歩み寄り」が、政府は教育や宗教、治安に関する公的措置に手心を加えることで、やはり「歩み寄り」を示していたことが発見できた。私は両者のこうした自制が「信頼関係」を築くことにつながり、哈密地区の安定に寄与しているのではないかと考え、哈密の民族関係と類似するモデルを構築していた精神分析学者ラカンの枠組みを借りて共生の条件を定式化した。それは、お互いが「ためらう」ことで信頼関係を作り上げ、さらに相手の肯定的な像を描き合ってそれを他方に呼びかけることである。こうして確立した自己意識であれば力関係の差異を越えて共生できる。これが哈密独特の民族関係である。

キーワード：哈密、精神分析、構造主義、ラカン、倫理

はじめに～語られた新疆と生きられた哈密～

(1) メディアと現実のギャップ

2013年6月26日早朝、自治区南部のピチャン県ルクチュン鎮（村）で出動した武警がヘリコプターで機銃掃射を繰り返し、住民35人が死亡した。また中国当局は発表していないが、8月8日未明に自治区南部のアクス地区で、公安が無差別に発砲して住民50人以上が死傷した。さらに8月21日。やはり自治区南部カシュガル近郊の街で、ヘリコプターで巡廻していた武装警察部隊が礼拝堂周辺に集まっていた住民20数人を発見。ヘリが機銃掃射したので住民は礼拝堂に逃げ込んだところ、地上部隊が激しい攻撃を開始。礼拝堂の住民は全員死亡した。それらの惨劇は13年4月から急増している。発表されただけでも死者は140人以上。発表されていない8月の事件を加えると200人は下らない。毎月平均40人もの市民が死ぬ現状は、もはや内戦状態と言っている¹。（相馬, 2014）

ある保守系雑誌に掲載された新疆に関する記事の一節だ。「内戦」という言葉が目を引き。記事中にある数字だけを見れば、「ただごとではない」という印象を誰もが抱くことになろう。政府が市民を武力によって徹底的に取り締まり、容赦なく弾圧する。そんな状況は確かに「内戦」としか言いようがない。しかし本当にそう言い切っているのかとも思う。報道によればこの数年来、年間100件を超える「組織的暴力事件」が起きているという新疆だが、まさにその時期にそこを毎年のように訪れている私の目には、少なくとも首都のウルムチや調査地の哈密はそれ以前とそれほど変わったようには見えなかったからだ。

(2) ウイグル族の知識人たち

私が新疆に初めて足を踏み入れたのは1990年である。その後、留学を含めほぼ毎年のようにこの地を訪れ、1999年からは新疆東部に位置する哈密を中心に調査活動を実施してきた。その中で、当地のいわゆる知識人（公務員、研究者、編集者、記者、教師、技術者、芸術家など）や、彼らから紹介された宗教関係者、商売人、そして農村の人々らに接し、インタビューや参与観察を行うことができた。

初めて出会った当初、この知識人の多くは30代前半で、民族意識も強く、自らが置かれた立場や民族全体の未来を憂い、国家や政府、そして漢民族に対する不満や批判を率直に口にしていった。飲み会の場で「womenyeshiren 我們也是人！（私たちだって人間だ）」と悲憤慷慨して訴えられたこともある。そんな感情が駆動したのか、彼らの中には哈密ウイグル族の伝統や歴史を調べたり、地域の名士の故事を掘り起こして論文や著作にまとめる活動を熱心に行っている者がいた。そんな活動を支援していたのが地元の『哈密文学』という雑誌で、彼らの作品を発表する場を提供している²。また『哈密日報』という新聞紙上で、やはりウイグル族の歴史や伝統を丹念に拾い上げ、掲載していた記者もいた。他にも、新疆の自然や風景を題材に、漢語で詩を発表し続ける小学校教師がメンバーの一人であった。

彼らの多くは新疆ウイグル自治区の教育・研究の中心であった新疆大学の出身で、卒業後哈密市内の国家機関に勤めながら親密な交流を続け、一種の知識人サークルを作っていたのである。いわば学術的側面からウイグル族の民族としての誇りの源になるような情報を発信していたわけだ。実際、彼らとともに哈密地区の辺境を旅した折には、その著作を読んだ当地のウイグル族から彼らが賞賛されていたシーンを目にしたこともある。記者はともかくそれ以外のメンバーは職業的な物書きであったわけではないが、お互いに刺激し合いながらウイグル族の文化に関する文章を発表していたのである。

この時期は「テロ事件」が頻発するようになった時代と重なる。しかし哈密の知識人たちが具体的なアクションを起こした気配はない。むしろ体制に順応していたようだ。彼らの中から哈密地区の民俗博物館の館長や、ウルムチにある新疆翻訳家協会の事務局長が輩出したし、編集者として北京の民族出版社に転出した者もいる。さらに、考古学が専門で文物局に務め、哈密市内に

¹ 「SAPIO」2014年1月号電子版の記事（http://www.news-postseven.com/archives/20131226_231420.html）より

² 『哈密文学』のウイグル語版は発行部数3千部、季刊で年に4回発行されている。小説、詩、散文を中心に編集されている。ウイグル族人口が100万を超える他の新疆内の大都市にも同種の文学誌はあるがせいぜい千部程度だそうで、「ウイグル族が10万程度しかいない哈密地区でのこの発行部数の多さは、哈密ウイグル族の知識水準や教養の高さを物語っている」と自慢されたことがある。

あるかつての封建領主哈密王の王宮跡などを管理していた若者は、2011年に経済担当の哈密市副市長に抜擢された。また、『哈密日報』の記者は、同年8月より哈密市政治協商会議の無党派代表の議員に選出されている。

こんな彼らを「^{weijian}維奸」（ウイグル族の裏切り者）と呼ぶのはたやすい。「私たちはそう呼ばれるかもしれない」などと冗談半分で語られたことも実はある。しかし現実にはあり得ない話だ。社会各層での彼らの顔の広さやそこでの親密ぶりを、哈密を訪れるたびに私は目の当たりにした。このことは、彼らのようなウイグル族を許容するどころか信頼を寄せる土壌というか雰囲気は哈密にはある、ということをも物語っていると言えよう。

以上は全て、テロが続発するようになり、新疆における民族対立が激化したと言われる時勢下でのエピソードである。実際にテロ事件が生じているのは主として新疆の南部地域（^{nanjiang}南疆と通常呼ばれている）で、「哈密は南疆とは違う。特別だ」というのはこの地のウイグル族自身がよく使うフレーズである。私は新疆の他の地域については今に至るまで深く取材する機会を持っていないため確認することはかなわないが、もし仮にそうだとすると、なぜ哈密だけが「特別」になり得たのかがどうしても知りたくなる。その理由が見えてくれば、哈密の事例が新疆の民族問題を少しでも好転させていく格好のモデルケースとなり得るからだ。

本稿の目的はそこにある。新疆の中で際立って安定しているように見える哈密の民族関係のあり方を分析し定式化すれば、他地域への応用可能性を探ることもできよう。というわけで、私自身が現地で収集した民族誌的資料を駆使し、哈密のウイグル族や漢族らが築き上げてきた「秩序」の成り立ちを掘り起こしていくことが、これからの論考の主な内容となる。まずは私が深くつきあってきた哈密の知識人たちを例にその生き方や考え方を掘り下げ、それが周囲の人々に肯定されている理由を明確にしていきたい。彼らを通して、漢民族に受容されウイグル族にも信頼される少数民族のあり方を描き出すつもりである。

1. 民族として、国民として

(1) ウイグル族のジレンマ

「漢族が全ての資源を持って行く」「漢族による乱開発で水資源が枯渇した」「漢族の学習法は暗記ばかりで面白くない」「漢族の核実験でウイグル族にガン患者が増えている」「漢族はウイグル族に知的労働の機会を与えない」「漢族はウイグル族を奴隷にするつもりだ」。ウイグル族から耳にたこができるほど聞かされる漢族への悪口のほんの一例である。まるで全ての不幸を漢族の責任に帰しているようだ。とにかくウイグル族が何名か集まれば、必ずそういう話になる。

彼らが政府や漢族に不満を持つ理由は、政府当局による新疆統治の方法にある。ウイグル族の感情を無視した強引で高圧的な統治に反感や怒りを覚えているのである。従って、まず何よりの願いはウイグル族の存在をもう少し顧慮すること、言い換えれば中国領内に住む公民としてそれなりに尊重されることであろう。端的に言えば、主流民族である漢族と同等に扱われることである。そのためにも、ウイグル族が漢族に引け目を感じることがないように、哈密の知識人らは自分たちの歴史や文化、そして故郷新疆の自然環境などを文章によって称揚し、その優秀さを示すことによって、彼らにささやかな誇りを与えることを企図していたと私は思う。

しかし、では完全な平等がいつか実現するのかということ、それは困難であろう。テロやデモなど具体的に行動したところで奏功しないことは、近年の新疆情勢からも目に見えている。民族間

の不公平を強引な手段で是正していける可能性は限りなくゼロに近い。公平を望みながら、それが不可能であることを認めざるを得ないというジレンマを抱えているのがウイグル族なのである。ジレンマはジレンマである以上、原理的にどちらかを選ぶわけにはいかない。とすれば残された道は両立しかないことになる。「公平を願いながらも不公平を受け入れる」という両者の折衷的な態度がウイグル族の唯一の選択肢なのだ。

(2) 公平と不公平のはざままで

この視点から見たととき、哈密のウイグル知識人たちの社会的行動の背景が見えてくる。高いレベルの漢語の習得や使用、漢族社会で一定の地位や信頼を得ることへの強い意欲、そして当たり障りのない内容の文章を用いたウイグル族の称揚。これらは全て「不公平の甘受」の一環だったのではないだろうか。漢語を身につけ、それで自分たちの考えを表現することは最もわかりやすい漢族への歩み寄りである。また、国家機関で出世をねらうことは権力資源をめぐって漢民族と競合することにもなるが、それは同時に中国の社会体制内に組み込まれることでもある。漢族側としては、そういうことに一切興味を示さず「社会の外に出る」、ありていに言えば反体制的になられるよりは遙かに望ましいことであろう。

彼らの旺盛な著作活動も恐らく同様の意図から生まれている³。例えば民俗博物館館長になった方の論文「哈密ムカムの歴史的地位」では、ウイグル族の代表的民謡「12ムカム」が取り上げられ、その歴史的発展過程で中国歴代王朝の音楽に多大な影響を与えたことなどが詳細に語られている。シルクロードの歌舞が唐の時代に長安などで大いにもてはやされたことなどは周知の歴史的事実なので、それを改めてここで取り上げたとしても、ウイグル族の漢族への優越性を示す趣旨だなどと受け取る者はいないだろう。民族的な優秀さを自覚させて「分離・独立」のような「政治的に良からぬこと」を想起させる類の書き物ではないということを漢族側に暗示しつつ、しかしウイグル族の民族意識をくすぐることもできる内容になっているのである。

その他、プロの翻訳家として大成した例の小学校教師はアマチュアの詩人としても活躍していたが、その内容は既に述べたように新疆の過酷でかつ美しい自然環境を描いたものである。現実社会とはかけ離れた題材でその地を活写しているため、厳しい環境に生きるウイグル族のたくましさを政治に抵触することなく訴えることができている。新聞記者であり、政治協商会議のメンバーにもなった方は、民間歌謡やことわざ、伝説の収集・整理・編集・出版に携わったことなどが、自ら語ったそのライフヒストリーに書かれている⁴。いずれも政治とは無関係なテーマである。

いずれの著作もウイグル族の誇りを喚起する可能性を秘めたものなのだが、題材も中身も政治的に許された範囲内にとどめている。同じ民族意識を刺激するものであっても、テロやデモなどのような実行使ではない。政府の意向を超えず、あくまで「穏健な」行為だという意味で、これらの表現活動もまた政府や漢族への歩み寄りと言えよう。民族間に明らかな不公平があるとしても、それに対して真正面から抗議することなく、むしろ自ら歩み寄ろうとする。まさにこの「不公平の甘受」こそが、私が出会った哈密の知識人たちの「生きる道」だったのである。

³ それらの一部を私は熟読し、科研報告書（平成23年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書:課題番号23401049）に翻訳を掲載した。

⁴ このエッセーについても、上記科研報告書（2011年度号）に翻訳を掲載している。タイトルは「業務報告 - 私の履歴書 -」である。

もちろん公平への願いもおろそかにはしていない。あの、「漢族が…」という一連の他責的な語り口を想起したい。彼らがそれを執拗に続けるわけは、「公平への願い」を忘れないためなのではないだろうか。「現実には大変困難な状況にあるが、いつかはきっと」。そんな矜持を誇示するためにあえてそうしているような気がしてならない。付け加えれば、穏健な著作物の刊行によって民族意識をくすぐる上述の試み自体、公平を願っての営みであると言っていい。公平に扱われる資格が十分にあることをウイグル族に教えることになるわけだから。

以上のように考えれば、彼ら哈密の知識人たちは「公平と不公平の間」をいわば振り子のように往復することによって、かろうじて両立を成し遂げていたことになる。中国国民としての立場を大切にしながら民族意識も涵養する。それが哈密のウイグル族知識人たちの生き方であると言えよう。そして、この「あくまで公平を諦めない」という「民族」へのこだわりがあったからこそ、彼らの言動に対して哈密のウイグル族社会は「認可」を与えていたのではないだろうか。

(3) 不公平を甘受するために

ただ、釈然としない思いは残る。「公平を願いつつ不公平を受け入れる」ことが彼らの生き方だ、という風に言葉でまとめてはみたものの、そもそもそんなことが簡単にできるものなのだろうか。行政機関に勤めるある若いウイグル族の青年から、テロの原因についてこんなことを聞かされたことがある。「仕事もなく、だからお金もなく、そうなった理由を漢族に求め、彼らに対する『^{qi}気』(漢語で怒りの意味)がたまっているにもかかわらず、それを発散する場を持ってないウイグル族たちにはもう強硬手段しか残っていない」。公平を渴望しながらもその見込みがない中で不公平を甘受し続けていると、抑えられた感情がどこかで爆発する。「不公平の甘受」もまたテロなど暴力事件の温床になってしまうのである。

しかし哈密の政治情勢はずっと穏和だ。ということは、この地の知識人や彼らを信頼している庶民たちは、上記のいわば「心理的な代償」を払うことなく「不公平を甘受」できていることになる。それはなぜだろう。一つの仮説だが、彼らはもしかすると不公平の受容を正当化しているのではないか。そうであれば確かに心理的代償が生じることはない。では、哈密の人々はどのようにしてそれを行っているのだろうか。それを解明することが次のステップである。

3. ウイグル族の「精神分析」

(1) 矛盾する語り

ウイグル族知識人たちの語りを聞いていると、ある種の「矛盾」に気づく。政府を批判しておいて、その直後にそれを埋め合わせるような話に移ったり、日頃当局を警戒する発言をしている人が、あたかもそれを恐れない発言をしたり。着目したいのは、これらの「矛盾する語り」はどれも現状に対するそれなりの好意的評価とも受け取れるということだ。とすれば、そこには「不公平の甘受を正当化する」方法と関わる何かが隠されていると考えてもおかしくない。そこで本章では、彼らがどんな事項を、どういうふうに着目しているのかを具体的に見ていくことにする。

①新疆の自由さ

例の知識人の一人に郊外のレストランに連れて行かれ、そこで開かれていたパーティーに参加

したことがある。それは養牛場の手広い経営で実業家として大成功したウイグル族女性が主催したもので、目的はウルムチから彼女を密着取材に来たテレビ局記者の歓迎会ということだった。この人は実は福利連合会という地区政府の一部署のリーダーでれっきとした公務員であったが、平気でサイドビジネスを行い、しかもそれを隠すどころかおおっぴらに公開している。取材まで来るのだから相当に有名なのだろう。この席で側にいた知識人の彼に上記の懸念を伝えると、「今の中国はもうけるために何でもしたいことをやっていい。何と言っても自由なんだから」という思わぬ返事が返ってきたのである。「ウイグル族は政府に抑えつけられ大きなビジネスをさせてもらえない。せいぜい小さな商売を始めることができるだけだ」という愚痴を当の本人から以前聞いたことがあっただけに意外であった。この女性実業家の存在は彼のその言葉と明らかに「矛盾」していることがわかる。この事例が浮き彫りにするのは新疆の自由さだ。ウイグル族はそれを普段は頑なに否定しているわけだが、なぜかそれに反する語りをぼろっと漏らしている。

②実は民主的で平等

やはり知識人の一人と市街地の外れを散歩していたときのことだ。その辺りは交通量も多く、道の両側には建築資材や車両の部品を販売したり、修理を請け負ったりする小さな店が隙間なく軒先を並べていた。全て内地から移民してきた漢族が住み着き、開いたものだという。そういう話になれば例外なく始まるのが、政府の移民政策に対する批判である。「元々はウイグル族の農民だけが暮らしていた静かな郊外に漢族がやって来て、静けさもなくなり環境がすっかり変わってしまった」、などと一席ぶち始めたのである。

しかしその後、話は意外な展開を見せる。商店群の背後に大きな更地があり、その中に一棟の建物がぽつんと建っていたのだが、それを示しながら「ここら一带は開発されることになり、元あった家は全て立ち退いたのに、あの建物の持ち主だけは補償金に満足できず、ああして立ち退きを拒んでいる」と語ったのである。驚いて「政府は普通、強制的に立ち退かせるんじゃないの」と問い返すと、「今はそんなことは許されない。あくまで話し合いによって解決される」とのことであった。中国とはこんなに民主的な国だったのだろうか。

③経済発展への好感

先述の民俗博物館館長とイスラームについて対話していたときのことだ。ウイグル族はアラブのムスリムのことを「ナチャル」(naqar)と呼ぶが⁵、この言葉には軽蔑の意味が込められている。「なぜならアラブ世界はテロや戦争で社会が乱れている上に、イスラエル一国に束になってかかっていっても勝てないからだ」そうだ。それなのになぜそんなアラブ世界に神がまず最初に現れ、コーランをアラビア語で著させたのか。これについてウイグル族は、「何も彼らが優れているから神が彼らを選んだのではなく、古来部族同士の対立や争いが絶えない彼らを哀れんで、彼らを団結させるためにムハンマドを用途として遣わした」と解釈しているという。そして「アラブ人だけが神に近いわけではなく、トルコ人もペルシア人もアラブ人もみな神の下では平等なのだ」と続け、イスラームの本流でもなく、酒を飲むなど戒律を守ってない印象が強いウイグル

⁵ 辞書的には、劣っている、良くない、という意味がある。ものの品質や病状、気候が良くないというときなどに使われるようだ。

族をムスリムとして持ち上げるのである。最後は「アラブ人は酒を飲まないかもしれないが、その社会は乱れきっている。しかし我々ウイグル族は確かに酒を飲むけど社会は落ち着いている」と結論づけた。

この一連の話にウイグル族の誇りが表されているのは誰でもわかるが、読み取れるのはそれだけではない。「社会が落ち着いている」わけは、アラブ世界と違ってウイグル族の生きる中国社会が政治的・経済的に安定しているためだ。この事実を暗に物語っている上記の語りは、中国への「肯定的評価」とも受け取れるのである。

④漢族の民族性

減多に口にされることはないものの、その出来事についてインテリのウイグル族であれば誰もがよく知る「東トルキスタン共和国」⁶について、ある若いウイグル族が語ってくれたときのことだ。1944年に新疆で成立したウイグル族の独立政府の軍隊は、共産党の軍隊によって騙されて窪地におびき出され、周囲から一斉射撃を受けて全滅させられたのだという。まさに「だまし討ち」である。また、中国で毎日のように放送されているいわゆる「抗日戦争ドラマ」の中でも、国民党軍が真正面から日本軍と渡り合うのに引き替え、共産党軍はゲリラ戦で後方から攪乱しつつ戦うという描かれ方なのだそう。この例を引き合いに出して、「共産党は本当にずるがしこく狡猾だ」とお決まりの政府批判が始まった。

しかしそれに続いたのは、ウイグル族がよくするというこんな笑い話であった。「今もし戦争をするなら、漢族は参謀長、ウイグル族は兵隊、回族はコックだ。漢族はずるがしこいから作戦を立てるのに向いているし、回族はどこに行っても食堂を開く。そして勇敢で頭に血が上ったらすぐ行動に移すウイグル族は兵士にこそふさわしい」。この一連の語りをどう解釈すればいいのだろう。ぱっと見た限りでは漢族のずるさ、陰険さを強調しているように見える。しかしこうも受け取れるのではないだろうか。ウイグル族は思慮が足りず感情が先走るばかりで、上に立つ器ではない。それに比べると漢族は賢明で深謀遠慮があり、リーダーとしての資質が備わっている。要するに、漢族の能力については悔しいけど認めざるを得ないという気持ちを感じられる語りではないだろうか。

(2) 「症候」としての語り

哈密のウイグル族に頻繁に見られるこの「矛盾」の理由を考えてみよう。フロイトの精神分析理論によれば、「無意識」の中にあるものが表に出てくるとき、その内容は元の形とは全く「矛盾」する別物に変わっているという。例えばヒステリーのように、「ふつうの形では表現できない心の働きの代用品として形成される」のである（前田，1981：14）。また、同じ精神分析の手法を応用して映画論を展開する内田樹は、「似ても似つかぬものに『置き換え』られる」と述べる（内田，2003：88）。

この「心の代用品」や「似ても似つかぬもの」は「症候」と呼ばれるが、最後に挙げた共産党

⁶ 1930年代と1940年代にそれぞれ「東トルキスタン」という名のついたウイグル族やカザフ族ら新疆のトルコ系少数民族による独立国家が新疆に生まれている。前者は1933年に南疆で、後者は1944年に新疆北部で誕生した。いずれも短期間のうちに崩壊、あるいは帰順というかたちで消滅してしまう。しかし、その後のウイグル族の独立運動では多くの場合、この「東トルキスタン」という名前が掲げられている（王，2011：16）。

の軍隊に対する寸評の例が示すように、言葉としては中国を否定しているのに賞賛とも受け取れるニュアンスがあるような語りは、表と裏の二つのメッセージがあるという意味でまさにこの「症候」に近い。無意識下に存在しているもの（賞賛の気持ち）が言葉として表出されたとき、全く違ったもの（否定の言葉）に「置き換え」られたという風に考えることができるからだ。私が接してきた哈密のウイグル族知識人たちは、この「症候」としての語りを私に発していたのではないだろうか。

そうだとすると、彼らの心の奥深くに中国政府や漢族に対する肯定的な認識が潜んでいることになる。ウイグル族には「漢民族は悪、虐げられるウイグル族は善」という「支配的なイデオロギー」が機能しており、これに反する出来事は全て無意識という名の器に放り込まれ蓋をされているためだろう。いわゆる「抑圧」である。ただ、この蓋が抑えきれずに「症候」として彼らの語りやふるまいの中に現れてくるということなのかもしれない。認めたくはないので「抑圧」する。しかしそれが形を変えて、その抑圧されたものの「症候」として会話や振る舞いの中に出現する。それが私にも明らかに感じ取れたように、他のウイグル族にも読み取られることは十分にあり得よう。こうして、結果的に中国政府や漢族に対する肯定的評価が多くのウイグル族に共有されていく。それらはまた抑圧されるが、結局は形を変え、「症候」として表出されてしまう。哈密で起こっていたのはそういうことではなかったのか。

この「症候」としての語りが、漢族とウイグル族の安定的な民族関係を打ち立てる上で重要な役割を果たしていたのではないかと私は睨んでいる。不公平を甘受するといっても、一方で公平を強く願っている以上、それはそんなに簡単なことではない。漢語を上達させ、不利を厭わず中国という国で生きていこうと決意できるためには、そうするに値するだけの条件がなければならないのである。それが政府や漢族に対する肯定的評価の獲得であった。それがあって、初めて体制に順応することを何とか正当化できる。しかし、そもそもあからさまに政府や漢族を賞賛するわけにもいかない。普通のウイグル族ならまず誰も承伏できまい。だからこそ、「症候」としての語りは非常に都合のよいものとなる。語りそのものは往々にして「いつものウイグル族らしさ」に溢れていてウイグル族なら誰にも受け入れられるものだが、実際には正反対の意味が隠されているのだから。

そう、この「症候」的な語りの積み重ねによって、自分はもちろん他者に対しても政府や漢族への肯定的評価を少しずつ定着させていくことができるのである。こういう屈折したプロセスがあって初めて、民族の矜持を保ちながら、その上で漢族の体制に順応していくことが可能になる。哈密のウイグル族知識人たちは、恐らくこういうことを行っていたのであろう。もちろんそれが可能になるためには、政府当局や漢族の側に「肯定される」だけの材料がなければならぬ。そういうものが実際にあれば、たとえ抑圧されたとしてもいずれは「症候」として具現化する。恐らくウイグル族が不公平の甘受を正当化することが、現状では唯一の共生への道なのだ。政府や漢族の側も多少の譲歩を行うだけの知恵や感性はあると考えた方がいい。それを見つげ出すのが次の目標である。

4. 「症候」を生み出すもの

(1) イスラームへの「手心」

新疆ではイスラームの勢力がウイグル族の「分離・独立運動」と密接に関わっているとされて

いるため、政府当局により厳しく管理されている。漢族でありながらウイグル族の実情をルボし、告発してきた王力雄によれば、公立学校の校内には「違法宗教活動」の内容を記した貼り紙が掲げられているそうだと(王, 2011: 224)。例えば宣教・教育・生徒の礼拝の黙認, 宗教税, 宗教施設の開設, 宗教資料の印刷・配付, 当局と異なる宗教的言説, 集会等々とにかくイスラームに関するほぼ全ての活動が否定されているという。

哈密で回族が経営する小さな食堂に入ったときに、私も似たような掲示物を見たことがある。ところが同じ哈密市内にあるウイグル料理の食堂に入った時、目を疑うようなポスターを発見した。それは縦1メートル、横2メートルを軽く越える大きなポスターで、まず目を射るのは少女が空を見上げながら両手を天に掲げている大写真の図柄だ。背景にはモスクも描かれ、「アラーはいつも私たちを見ている」という言葉がウイグル文字で記されていた。これは誰がどう見てもイスラームの宣伝だろう。これだけ人が集まる公共の場で、どうしてここまで堂々とこんなポスターを貼り出すことができたのか。恐らく「お目こぼし」なのだろう。政府レベルでの公的な発言の一方で末端の現場ではこういう対応がなされているのである。

イスラームに関するこの手の「お目こぼし」は他にもある。2011年の「ローズ節」(roza heyti: 1ヶ月に及ぶ断食が明けた日の祭り)の時、私はあるウイグル族の高校生の案内で、彼の親族の墓参りに同行させてもらう機会を得た。早朝に家族親戚うち揃って大きなモスクに参り、ナマーズ(namaz: 礼拝)を行った後、そのまま家族や親族、祖父母など近い祖先の墓に向かったのだが、その道すがら、あるウイグル族の青年を紹介されたのである。まだ30才そこそこの彼は、私の案内者である高校生の「イスラームの先生」ということだった。父親の勧めで彼の元に通い、クルアーンを学んでいるそうだと。彼はイマーム(imam: イスラームの一種の聖職者。モスクでの礼拝を主宰する)なのだそうで、墓参りの際にも親族一同の前でクルアーンを美しい声で朗読していた。

この「先生」の存在についても私は驚きを禁じ得なかった。今の新疆では政府が認可した「jingwenxueyuan経文学校」(イスラーム学院)以外でイスラームを教えるはいけなかったはずだ。「今はモスクでは一切の教育活動を行ってはいけないし、家に生徒を呼んで教えるのもだめだ」とウイグル族からよく聞かされていたし、先ほど紹介した公立学校の貼り紙では、宣教・教育は禁じられているのではなかったか。しかしこの「規則」はあっさりと覆されていたのである。イスラームに対する「公的方針」はもちろん存在するのだろう。しかしその発動についてはかなり「手心」が加えられている。青年イマームの存在を見ていると私にはそうとしか思えない。そもそも彼のような経歴の人がイマームであるのも、よく言われる新疆の実情から鑑みると実に奇妙な話だ。前述の王は、あるウイグル族の次のような語りを紹介している。「いまのモスクのイマームはどんな人だと思う。政府が選んで、政府が派遣し、毎月政府の給料をもらっている」(王, 前掲書: 323)。私もそう聞いた。ウルムチにある「イスラーム学院」を卒業した者しかイマームにはなれないという。

ところが、実際に農村のモスクを訪ねてみると必ずしもそうではなかった。私は10軒近いモスク取材し、そこのイマームにもインタビューしたことがある。中には10年以上にわたって継続的に取材してきたイマームもいる。皆、50代から70代の年配者であったが、「政府が選んだ」人は誰一人としていなかった。新疆においては、ウイグル族が多く住む地域では、村ごとに必ず一つモスクを設置することになっている。数家族しか住んでいない、彼らの言葉で言う「自然村」でもモスクが置かれているという。私が調査したのは、こういった人口100名から3~400名程

度の村のモスクであるが、どこもその村で信頼の厚い、地元の長老的立場の老人がイマムに選ばれている⁷。ここにも「妥協」が顔をのぞかせているのである。

(2) バイリンガル教育の現実

現在の新疆における民族政策で最も批判を浴びそうなのが「shuangyu jiaoyu双語教育」(バイリンガル教育)政策である。元々ウイグル族ら少数民族が密集する地域には民族学校が設置され、そこでは教科書にも授業用語にも民族の言葉が使用されていた。教師は当然その民族の出身者だ。ところが2000年頃より実験的にあちこちの民族学校で漢語の使用が試行されるようになった。理工系の科目は漢語で、文科系の科目はウイグル語など民族語で実施される⁸。そして2010年から全新疆でこれが正式に実施されることになったという。その年に入学した小学生がこの「shuangyuban双語班」(バイリンガルクラス) 1期生である。ここで大きな問題になるのが民族教師の漢語力だ。それまでウイグル語など母語で教授していた教師が、今度は同じ内容を漢語で説明しなければならない。板書も漢語で行わなければならないし、教科書も漢語で読まなければならない。そして、「できなければ解雇だ。学校は教師をグループ分けして、中国内地に漢語研修に送り出している」という(王、前掲書：195)。

私も似たような話を哈密で耳にした。しかし「できなければ解雇」というのは本当なのだろうか。王はその著作の中でこの話題に何度も触れていて、「学校は現在、競争就業(終身雇用を廃止し、定期的に試験を実施して評価の低かった人を失職させる制度)を行っており、結果は決まって地元民族の教師が切り捨てられている」とか、「年を取ったら、五年一〇年かけても漢語で授業できるようにはならない。彼らは仕事から外され、クビになる」などという、あるウイグル族の語りを紹介している(王、前掲書：258)。しかし私が話を聞いたウイグル族の民族学校の教師によれば、確かにそういう制度があるが、実際は何度でも漢語の試験を受けるチャンスがある、というか合格するまで受験させるということであった。「クビ」というのはなく、いつまでも合格できない教師は学内の他の業務に配置換えされるのだと言っていた⁹。

⁷ イマームが亡くなったり、老齢で礼拝の主宰が困難になったりすると、すぐに次のイマーム選びが始まる。まずは礼拝に訪れる常連メンバーによって議論されて数名の代表を決め、彼らがそのモスクに通う村人の意見を聞いて回り、その中から選ぶ。こうして村での選抜が終わると、地元の郷政府にある宗教管理部門に報告し、そこで承認されれば正式に決定ということになる。通常はその村の出身者が候補者になる。なぜならイマームは礼拝だけでなく、村のもめ事の調停、葬式の際の各種のアドバイスや主宰、他にも赤ちゃんの命名、婚礼や頻繁に行われるナザル(nazir: 死者や祖先の供養のための儀式)への参加など、地域社会と密接に関わった役職だからだ。従って、彼はその地域で暮らす人々のことを熟知していなければならない。因みにモスクには副イマームがいて、正イマームの側で長年学んできているので、彼が十分に成長し、その資格があると見なされている場合はそのままイマームになることが多い。この副イマームもまた同じように村人によってその村から選ばれる。誰に聞いても異口同音にこういう過程を語る。

⁸ 哈密で実際に小学校教師を務める方によると、「語文(ウイグル語)」「音楽」「体育」「総合(家庭科)」「社会品德(道徳。中学校ではこれが「政治」という題目になる)」が従来通りウイグル語で実施され、その他の科目は全て漢語になったという。

⁹ この教師は、ここまで何度も触れた哈密の知識人の中でも私と特に親しい方の気心の知れた友人だったので、無理に現実を美化する必要はなかったはずだ。従って上記の話は信用できる。因みにこの人自身も新疆大学に漢語の研修を受けに行き、2年間そこで学んだという。40科目ほど受講したそうだからかなり本格的な研修だったのだろう。そして学費や生活費、旅費は全て公費ということだった。因みに研修終了後の試験に合格しなければ、この費用は全額返還を求められる。これは大きなプレッシャーとなるはずだが、上述したようにほぼみんな合格するということがあった。

また王も、この漢語の試験では「替え玉受験」が流行っていて、「最終的には大部分の人が合格できる」という挿話に触れている（王、前掲書：195）。本気で試験監督をすれば、こんないかさまの受験が成功するはずはない。要するに「適当に」実施しているのだろう。全員を合格させることを前提にして。ここにもまた「手心」が加えられていることがわかる。もう一つ付け加えておくと、上記の現役教師によれば、漢語研修への参加は強制ではなく、自分で決められるという。教育局から各学校に人数が割り当てられるため、それに応じて校内で希望者を募るわけだが、行くかどうかは教職員自身を選択するということであった。学校側も彼らの家庭の事情を考慮してくれるという。これもまた「手心」というか配慮の一つであろう。

(3) 治安の不徹底

最後に公安（警察）の取り締まりに関するいくつかのエピソードを紹介したい。いつもの知識人らと共に郊外のレストランで飲み会を開いた後、みんな酔っぱらいながら歩いて市内まで戻ってきた時のことだ。哈密軍区司令部の正門の前を通りかかると、一人のウイグル族男性が守衛室の目の前で何やら叫んでいたのである。私はほとんど聞き取れなかったが、それを見た我々の一人が近づこうとすると、「関わりになるな、やめとけ」と別の者が強く静止していたところから見て、あまりいい内容の話ではなかったはずだ。しかし当の守衛は全く相手にせず、何やらわめき続ける男を適当にあしらっていた。先述したように、「兆しが見えなくても弾圧し、どこまでも追撃する」というのが当局の方針だというのだが、のべつ幕なしにそうしているわけでもないのだろう。当たり前である。本当にそんな方針で取り締まっていけば、それこそ全てのウイグル族が「弾圧」の対象となってしまうのだから。

また、この論文の中で幾度となく触れてきた、ウイグル族による政府や漢族への不満や批判についても同じことが言えるのではないだろうか。例の知識人たちは若い頃はともかく、今では慎重で抑制した物言いが普通で、不用意なことはあまり言わない。言うにしてもユーモアを交えたり、皮肉を言ったりと、婉曲に表現することが多かったように思う。不公平を甘受しようとしているわけだから当然であろう。しかし彼らの友人や親族の中には、私との初対面でいきなりそういう言葉を発してくる人もいた。いくら彼らの友人からの紹介とはいえ、素性のわからない外国人の私に対する発言としては不注意が過ぎる。それこそ公共の酒場のような場所で「くだを巻く」ように訴えてくる人もいるが、こういう人たちは普段もこういう感じなのだろう。実際、「また始まったか。こいつは変人だから相手にするな」と私に忠告してくれる人もいた。しかしこうした事実そのものが、日本のマス・メディア上でよく非難されている当局の「弾圧」の意外な「不徹底ぶり」を物語っている。彼らは割と自由に心中の言葉を吐くことができているからだ。

以上、イスラーム、バイリンガル教育、そして治安という三つの観点から当局の対応振りを整理してみた。すると、公的制度や発言とは裏腹に、現実の生活の場では「目こぼしや手心」といった譲歩が頻繁に見られることがわかったのである。ウイグル族が意識的であれ無意識的であれ、不公平の甘受を正当化するには十分な「プラス材料」になるような気がするのだが、それは私の希望的観測に過ぎないのだろうか。

5. ラカンによる共生の定式化

(1) 哈密と構造主義

ここまで哈密のウイグル族や当局双方の言動をいわば「俯瞰する」ことによって、互いに相手に対して発する語りの裏側にある葛藤（抑圧と症候という心理的作用）や思惑（手心による懐柔と同化への深謀遠慮）を浮き彫りにしてきた。ウイグル族は「公平を願いつつも不公平を受け入れる」ことによって「歩み寄り」を示し、政府や漢族は教育や宗教、治安に関する「公的措置や通達」を日常生活の場で「骨抜きにする」ことで、やはり「歩み寄り」を示していた。どちらも表向きの発言とは別に、裏で譲歩の道を探っていたのである。哈密におけるウイグル族と漢族の平穏な共生を生み出していたのは、結局のところこういった「妥協の交換」だったのではないだろうか。

そして大事なことは両者が同時に「歩み寄った」ということだ。もし片方が反感や敵意をむき出しにしていたとすれば、相手方は譲歩しようなどという気にはなるまい。漢族やウイグル族が接する日常生活の場で、両者が「共に、同時に」歩み寄り始めたということなのである。この状況は、ウイグル族を抑えつけようとする政府や漢族、そしてそれらに恨みや怒りをぶつけるウイグル族が、そうではない存在へと「共に、同時に」生まれ変わるというふうを理解することもできよう。

これとそっくりな理論を私はすぐに思い出すことができる。構造主義だ。言語から物語、さらには人間の心理まで射程に収めて、それらの成り立ちを関係という枠組を通して解き明かそうとする一種の発想法である。哈密で起こっていることがいかにも構造主義的であるということは、そこに見られる安定的な民族関係の「成り立ち」がこの理論によって説明できるということだ。そして理論化とは現実の具体的で複雑な出来事の抽象化、単純化であり、まさに「定式化」への第一歩となる。そこで本章では、構造主義的思考を持つ研究者の代表格の一人と目されるジャック・ラカンの発想を援用し、哈密に見られる共生のプロセスを定式化していく。

(2) ラカンの自我論

ラカンによると、私たちの自我は「他者を經由して」創られる。生後1年近く立った頃、赤ん坊は鏡に映った自分の像を見て、それを自分と同一視するようになり、自己の像（つまり自我）というものを初めて知る。有名な「鏡像段階」だ。ではなぜ赤ん坊は他ならぬ「鏡に映った像」と自分を同一視することができるのだろうか。ラカンの詳細な解説者ジョエル・ドールによれば、「子供が自分自身の像の中に自身を認識するのは、他者が彼を既にそのようなものとして同定していることを予感しているからに他ならない。このように、子供は、彼の知覚する像がまさに彼の像であるという承認を、他者の視線から受け取る」のだという（ドール、1989：137）。

要するに赤ん坊は「他者の示唆、承認の下で」初めて同一視の対象を決めているわけだ。このときの他者とはもちろん母親である。そして、この「鏡像段階」以後、私たちはこれと全く同じパターンによって自我を形成していくことになる。赤ん坊にとっての母親的な存在、要するに「信頼できる他者」からのいざないがあって、初めて私たちは自分が何者なのかを把握していく。それは「信頼できる他者」の心の中にある「今の私の像」かもしれないし、「その人にとっての理想の私」かもしれない。私たちはまるで「鏡像」をのぞきこむかのようにそれを感知して、「これが私なんだ」と我が身を振り返ったり、「そういう私にならなければ」と決意を新たにしたり

りする。これが「他者を經由して」自我を形成するプロセスである。

(3) 理想の民族関係モデル

以上のラカンによる自我論が哈密の民族関係のあり方に酷似していることは、もはや明白であろう。哈密の知識人サークルを形成するウイグル族にとって、彼らが接する哈密の政府や漢族は恐らくそれなりに「信頼できる他者」であった。それは4章で詳述した通りである。だからこそ、彼らが抱く「理想のウイグル族」像に同一視し、自らの「自我」にすることができたのである。もちろん、哈密のウイグル族もまた政府や漢族にとって「信頼できる他者」であったがゆえに、ウイグル族の中の「理想の政府」像や「理想の漢族」像を受容でき、できるだけそのように振る舞おうとしたと言わなくてはならない。ラカンの自我論をフレームとして使えば、哈密の民族関係はこのように定式化できるのである。そしてこの結論から、平穏な民族関係を打ち立てるための三つの条件を提案することができる。

- ・互いに相手に対して「理想像」を持つ。それを受容してもらうためには「信頼関係」が必要である。ただしこの「理想」の中身は、相手が受容できるよう、節度や敬意に基づくものでなければならない。
- ・相手についての「否定的な像」を互いに持ってはならない。またそれに同一視させないように、「信頼できる」立場の者がその像を否認する。
- ・この「信頼関係」は双方の「ためらい」によって築かれる。

少し補足しておきたい。「公平を望みつつ不公平を受け入れる」のが哈密のウイグル族知識人たちの原則だと述べたが、こういう存在であることを「理想像」として描くというのが、上記の「節度や敬意」という言葉で私がイメージしているものだ。例えばラカンの著作を数多く翻訳した、彼の日本への紹介者である佐々木孝次は、母親への信頼の中で「鏡像」を同一視する行為を、「ゆだねる」と表現している（佐々木、1987:31）。そういう気持ちになれるような内容でなければならないということだ。具体的に言うと、漢族の場合であれば、ウイグル族の立場や事情を察知し、彼らについて「反感や敵愾心を何とか自制して体制に順応しようとする少数民族」といった像を持つことである。自分だけにとって都合のよい像を描いたところで、それは反発を買うだけだ。

また、相手についての否定的な像を抱くことは許されない。何と言っても「他者を經由して」自我が形成されるのだから。例えばウイグル族に対して「テロリスト」という像を漢族が持てば、実際にそういう自我を持つ者が必ず出てくる。あるいは当局に対して「弾圧者」という像をウイグル族が押しつけければ本当にそうなる。ただ、否定的な像を抱かれていたとしてもそれに同一視するかどうかは、「信頼できる他者」の承認にかかっている。新聞報道によると、「テロ事件」に関わるのは80年代以降に生まれた20代から30代の若者が多いという¹⁰。この世代のイスラムへの意識の高さは私も実感してきた。しかし年長者を敬愛する伝統が定着しているウイグル

¹⁰ 読売新聞電子版（2013年11月27日）は、中国の政府系週刊誌『瞭望』の記事を紹介する形で、いわゆる「テロ事件」に「関与しているのは大半が1980年代以降に生まれた若者で、学歴は中卒以下」と述べている。

族なら、より年配の者たちがこの否定的な像を打ち消すことも不可能ではないはずだ。

最後になるが、お互いに「信頼できる他者」になるための方法として挙げた「ためらい」については、もはや何も言う必要はないだろう。ウイグル族も政府・漢族も共に、その内心の渴望や公的な言明を自制して歩み寄ることで「信頼関係」を築いていた。このことを具体的な事例で証明しようとして、本稿の紙数の大半を私は費やしてきたのである。ウイグル族は公平を強く願いながらも敢えて不公平を甘受しようとする。政府や漢族は権力に基づく「公的措置」を発表しながらも実施には敢えて手心を加えようとする。結局、強く欲することの実施を「ためらう」ことでしか、激しく対立する者同士がお互いの尊厳を守りつつ共生していく、という困難な課題を達成できないのかもしれない。

「言うは易く行うは難し」という言葉は承知のうえで、私も敢えてこういった提案を行ってみた。実際に哈密では本稿の主人公であるウイグル族知識人らがこれを日常的に実践していたのだから、決して不可能ではないはずだ。

おわりに～民族関係の「倫理学」へ向けて～

本稿の目的は、哈密独自の安定した民族関係の理由を探り、それを新疆の他地域にも応用できるようモデル化することであった。この目的自体は曲がりなりにも達成されたと自負している。しかしなぜ他ならぬ哈密だけがそうだったのか。もし哈密に特殊な条件が揃っており、それは他の地域ではあり得ないことだとすれば、いくらモデル化したところで応用の可能性は低くなる。

哈密と新疆の他地域との差異はウイグル族自身もしばしば口にする話題だ。例えば哈密は「文化水平」(知的レベル、教養の高さ)が高い、識字率が高い、大学進学率が高いなどよく言われている。ということは、1999年まで実施されていた国家による仕事の分配では多くの若者が国家機関に就職できただろうから、中国の社会体制内に組み込まれている人の割合が他の地域より高いのかもしれない。当然、国家への順応意識は高まるし、また現状維持を願う保守的な層が多い可能性もあろう。

他に、哈密の地理的・歴史的な特殊事情を挙げる人もいた。哈密は新疆の中で最も東にあり、漢民族が圧倒的多数を占める地域に近い。歴史上漢族との接触が多く、通婚もしばしば行われたはずだ。そのせいか容貌も南疆ほどトルコ系の雰囲気強いわけではない。こういった面からお互いに親和性を感じる部分もあるのでは、という意見を聞いたことがある。そもそも人口についても、哈密市では漢族がウイグル族の4倍近い。当然、地域や職場、学校でも漢族との接触は他の地域より多いだろうし、おかげで哈密のウイグル族が持つ漢語能力は新疆の他の地域に比べて優れている。これもまた互いの親近感を醸成することに一役買っているはずだ。

以上のような哈密の独自性が、本論で述べたようなウイグル族知識人をこの地で生み出してきたことは間違いない。こういう様々な条件の違いを無視して、哈密で成功しているモデルをテロが頻発していると言われている地域に当てはめるのは無理がある。だからといって、哈密と同じ条件にするために漢族移民を更に増やそうなどという無神経なことを言えるはずもない。ではどうすればいいのだろうか。哈密と同じ環境の地域でしか本稿での考察結果は適用できないのだろうか。そしてもしそういう地域がないとすれば、本研究は意味のないものになってしまうのだろうか。

いや、そんなに悲観的になる必要はない。私が行った提案は、民族間の関係で留意すべき「倫

理」であった。教養や経済力の有無、接触の多少、あるいは容貌の異同といった条件も確かに漢族とウイグル族の民族関係のあり方に関わってくる要因ではあろう。しかし例えば100人のウイグル族の中に漢族がたった一人であろうと、またその逆であろうと、あるいは半々であったとしても、民族に関係なく全員がそれなりに気分よく過ごせる社会であるためには、互いに節度と敬意を以て、相手の「肯定的な像」を描かなければならない。その意味で、本稿での提案は普遍性を持ったものだと私は考えている。

謝辞 本稿の基礎となる資料は、平成23～26年度文科省科学研究費補助金基盤研究（B）（研究課題名：「現代中国におけるウイグル族の民族意識とイスラーム信仰に関する民族誌的研究」、研究代表者：西原明史）による現地調査の実施によって収集されたものである。現地でお世話になったたくさんの方々にこの場を借りて深く感謝申し上げたい。

引用文献

- ・アブリズ・ウマル・アジ, 2011, 「業務報告 - 私の履歴書 -」(原題:「業務報告」, 西原明史訳), 『現代中国におけるウイグル族の民族意識とイスラーム信仰に関する民族誌的研究』(平成23年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書), 51-54。
- ・内田樹, 2003, 『映画の構造分析 ハリウッド映画で学べる現代思想』, 晶文社。
- ・王力雄, 2011, 『私の西域, 君の東トルキスタン』, 集広舎。
- ・サマット・アスラ, 2011, 「哈密ムカムの歴史的地位」(原題:「哈密木卡姆の歴史的地位」, 西原明史訳), 『現代中国におけるウイグル族の民族意識とイスラーム信仰に関する民族誌的研究』(平成23年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書), 34-39。
- ・佐々木孝次, 1987, 『甦るフロイト思想』, 講談社。
- ・ドール, ジョエル. (Dor, Joel.), 1989, 『ラカン読解入門』(小出浩之訳), 岩波書店。
- ・相馬勝, 2013, 「天安門抗議行動で当局発表の『テロ集団』ないとウイグル団体」, 『SAPIO』2014年1月号電子版。
- ・前田重治, 1981, 「アンナはなぜ水が飲めないか」, 『精神分析を学ぶ』所収, 有斐閣, 8-26。

[2015. 6. 25 受理]